

---

# 愚者に捧げる狂い花

クロワッサン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愚者に捧げる狂い花

### 【Nコード】

N0809M

### 【作者名】

クロワッサン

### 【あらすじ】

都立の定時制高等学校に進学した少年・木藤凌也は、登校初日から訳のわからない和服ゴスロリ少女に出会う。彼女に巻き込まれるうち、とある事件が発生して

## 第一幕・壊れた教室の揺らぎ（前書き）

ノクターンノベルズでR - 18 版も平行公開中。

## 第一幕・壊れた教室の揺らぎ

傷だらけの黒板、座るなり崩れ落ちた椅子、ひび割れた窓ガラス

二秒前までは定時制高校のゴミのような設備に舌打ちをしまくっていた凌也だったが、頭の中の内容が一瞬にして吹き飛んだ。

教室後部の引き戸を開けて入ってきた人物が最高にイカれていたからだ。

まず目を引くのが髪の上に鎮座している巨大なヒガンバナの髪飾りだろう。触手のような花弁が腰まである黒髪を歪に彩っていた。

唇に引かれたルージュは馬鹿みたいに鮮やかな真紅で、口元に湛えられているのは何を考えているのか分からない不敵な笑みだった。

美人である。近年大量生産されているわけの分からないアイドル連中なんかよりよっぽと容姿は優れているだろう。大きな目からはどこか淫靡なイメージが漂い、顔の皮膚は健康的で瑞々しい。

残念ながらファッションセンスも零。いや、マイナスの値を叩き出していた。ゴシックロリータと和服を足して二で割ったような意味不明な服装は、爪先から頭の頂点まで黒を基調にしたカラーリングで、服には所々「花」が散っている。

一言でこの少女を形容するなら「痛々しい」だろう。

「ごきげんよう。黒木明ですわ。以後、お見知りおきを」

お嬢様言葉の使用によって、「痛々しい」から「狂人」にランクアップした彼女を、凌也は呆然とした表情で見つめていた。全国から選りすぐりの奇人を集めたコンテンストの優勝者ですといわれれば彼はすんなりと信じただろう。

「みんな、仲良くしてやれよ」

チビデブハゲの三重苦を背負った教員が、何が楽しいのかニコニコと笑いながらうわごとを吐き出した。

優雅な仕草で唐草文様のバッグから教科書を取り出す少女を見て

それでも「かわいい」や「綺麗だ」という感情を抱きながら、  
凌也は少女の外見と自分の思考との両方を疑うかのように首を捻っ  
た。

## 第一幕・壊れた教室の揺らぎ（後書き）

ルーラルやライシユーほど明るい作品ではない……と思います。

## 掃き溜めに光る黒

「……………うぜえな」

凌也は窓を叩く雨音に顔をしかめる。

気分は塹壕に身を伏せている兵士だった。塹壕が布団であることと、身を伏せているのではなく横になっていることを除けばそこに大きな差異はない。

時間は分からないが、九時に設定した目覚まし時計を切った記憶は残っているため、もう起きる時間であることは確かだろう。

だが凌也は二度寝がしたかった。半覚醒の意識のまま布団にくるまっていることほど「生」を感じられることはない。起きて格ゲーを続行するという選択肢も目の前に転がっていた。テレビの電源を入れると、朝日が昇るまでやり続けていた格ゲーの画面が映し出された。どうやらプレステの電源を消し忘れたらしい。

布団の中から手を伸ばして格ゲー用のスティックを握るが、コンボ練習をし過ぎたために左手の関節にダメージが残っていた。今日は無理するべきではないだろうと思いついてプレステの電源を切る。窓の外を睨み付けて秘めた力を発動させようとするが、残念ながら凌也にそんな能力はなく雨は止まなかった。そうこうしている内にいつの間にか意識も覚醒してしまっており、凌也は仕方なく掛け布団を跳ね上げて起き上がった。

頭の片隅に走る痛みにも舌打ちを一つする。

時計を見れば午後四時だった。風呂に入っただけでは五時からの学校に合わないが、入らないという選択肢は考慮するに値しない。いちいち理論的に物事を消化していく自分の態度に辟易しながら、傍らに投げ出されていたトランクスを片手に風呂場へと向かう。

凌也はふと、風呂場の前で僅かながら水音を耳にした。蛇口を閉め忘れたかと思って風呂のドアを開けば、狭い浴槽には一人の少女

が浸かっている最中だった。

「あらあら。ノックもせずにお風呂の扉を開けるなんて、酷い方だわ」

少女は凌也の顔を見つめて、十五歳とは思えない妖艶な笑みを浮かべる。右手で心音でも聞くかのように自然な手つきで胸元を隠していた。それでも分かるほど豊かな胸を見る限り、いつもさらしを巻いて漬しているというのは真実なのだろう。

浴槽の外に投げ出した足は不必要なほどに艶かしい。ほんのりと薄紅色に染まった体には、臭い立つような色香があった。

「わりい」

「悪いと分かっているのなら閉めなさいな。それとも、一緒に入りたくて？」

「遠慮しとく」

凌也はそれだけ言って戸を締める。入居して一週間ぐらいのときに、出ようと思ったら鍵が引つかかったことがあったのだ。そこまですらよかったが、そう気の長くない凌也が鍵を叩き壊してしまい、それ以来風呂の鍵は効かなくなっていた。

「殊勝な心がけね。共同生活ではお互いに譲り合わなければなりません」

風呂場に反響する声を妙にエロティックに感じながら、凌也は肩を竦める。

少女・黒木明と、少年・安斉凌也は、平たく言うとアパートの一室でルームシェアをしていた。アパートと言っても駅に近い小綺麗な建物で、三階建ての家屋はマンションとの中間ぐらいに位置するクラスの物件といえた。下町と呼ばれてはいるが、二人の住んでいる葛飾区は腐っても東京都であり、とてもではないが一人暮らしで賄える家賃ではない。

事の始めは三ヶ月ほど前である。いろいろと問題があつて家に居るのが嫌になった凌也が物件を探していたとき、ちょうど明もそんな状況だったのだ。先にルームシェアを申し出てきた明に凌也は唾



然としたが、すぐに意気投合、現在に至る。

良く出来た話だと思いつつも、定時制高校の中には一人暮らしをしている輩も少なくないため、そう珍しいことでもないのだろうと勝手に結論づけていた。

二ヶ月ほど共に暮らしていたが何のイベントも起こらなかった。部屋は別室で、それぞれ鍵もかかる。しかし明はいつも鍵をかけていないようだった。「誘ってるのか」と思うほど凌也は馬鹿ではないが、流石に年頃の男と一緒になのに鍵ぐらい閉めるよ、とはいっても思っている。

とにかく、明のおかげで風呂トイレエアコン付きの物件に住むことができているため、凌也からしてみれば良いことづくめであった。特に意味もなく風呂場から漏れる音に耳を傾けていた凌也は、極めて現実的な質問を投げかける。

「お前、学校間に合わないだろ」

アパートから学校までは徒歩でわずか十分という距離だった。

なら遅刻しないかといえばそうではなく、すぐに行けるからこそ気が緩み遅刻を誘発していた。中学校の頃は遅刻四百回という伝説を作り上げた凌也にとって、規定時間に行けというのが無理な話である。それでも明と暮らし始めてからは改善の傾向にあった。

「あら。間に合わせる気の無いねぼすけさんに言われるのは心外ね。あなたは少し寝過ぎではないの？ バイトぐらいしなさいな」

「あー……別に欲しいものねえしなあ」

凌也は特にバイトをしているわけではない。母親からの仕送りで暮らしている。そう多くは無いが、もともと食が細い事もあり食べるのに困るほどではない。服やパソコン、ゲームが欲しいときにはふらりとバイトをしたりもするが、そうでないときは学校を除いて一日中ネットかゲームだった。

「なら貯金でもしておいたらいいが」

「考えとくよ」

別にバイトが嫌いなわけではないが、好きなわけでもない。凌也

は肩を竦めるとその場から去っていった。

風呂から上がった明はいつも通りの格好に着替えていた。ベースは黒い和服だが、袖口は必要なほど大きく開いている。腰帯には頭頂と同じく彼岸花の刺繍がされていた。前身に散らばった毒々しい花柄さえなければもう少しマシなのだろうが、なんとなく注意してみたところで「眼帯をしてない分はマシでしょう」と訳のわからない返事をしてくるだけだった。

「お前、本当になんとも思わないのな」

「嫌だ、恥ずかしい……とでも言えばよかったかしら？」

やたらとフリルのついた黒のロングブーツを履きながら、明が流し目で凌也の方を見る。

「なあ……登校の準備はいいんだけどさ、俺はまだ風呂に入っていないんだけど」

「いいじゃない。お風呂ぐらい」

よくは無かった。凌也にとって風呂はゲームとネットと睡眠と食事の次に大切な事である。しかしここで駄々をこねれば明は勝手にいってしまうだろう。

「……………わーったよ」

強気にそう言っただけで凌也も靴を履き替える。制服がないというのは、一つ定時制高校の長所であった。

「男と二人で暮らしてて怖くないのかよ」

ドアを開けた明の背中に凌也は質問を投げかける。

「貴方が？ 二ヶ月経てば犯して良いってルールがあるわけでもない、犯すなりなんなりするのなら、もうしてるでしょう」

「控えめに言っても外見はいいんだからさ……」

「あら、それはアプローチかしら」

「…………お前と話していると本当に疲れるよ」

くすくすと笑う明を見て凌也は頭を掻いた。

かれこれ三ヶ月の付き合いがあるが、黒木明が何を考えているのか凌也にはさっぱり分からなかった。

凌也が通っている定時制高校　都立焦洲第三高等学校は、この辺りでも非常に偏差値が低く普通の高校に進学できなかった生徒の受け皿として認識されている。凌也が言えたものではないが、ハーレーに跨ったヤンキーや舌にピアスをつけた女子高生たちは見るからに脳味噌が足りていなさそうだった。

その中で明はどこまでも異質だった。

成績は非常に優秀で、校内のやたら簡単なテストでは当たり前のように全科目満点を取っていたし、初日から『センター試験』とかいう大学入試に必要な共通審査みたいなものの勉強をしていた。

アパートから出て外を見て、雨が降り続いていることを思い出す。凌也は慌てて室内に戻ると所々穴の開いたビニール傘を手についた。傘を開くと、芯の部分が錆びていたらしく茶色い粉が舞った。驚いて傘を投げ飛ばした凌也を見て明がこころごとく笑う。

「嫌な雨ね」

そう呟く明は洒落た和傘を差している。黒基調のカラーリングにやはり毒々しい赤系統の花が散っていた。しかし服装とマッチしていることと、土台がいいことが相まって、これがなかなか似合っている。

（　似合っている？　）

常識人を自称していたセンスに狂いが生じ始めていることに気づき凌也は愕然とした。少女の美しさに狂わされたのだろうか　と自分の感情に詩的な観察を展開する。

「……本当に嫌な雨だわ」

先ほどと同じ言葉を繰り返した明に、凌也は根負けしたように声をかける。

「言葉の割には楽しそうだな」

「皮肉のつもりでやっているのだけれど、伝わらなかったかしら」

「いいや。伝わってるよ。俺も皮肉のつもりで言ってるんでね」

「あらあら」

明は楽しそうに笑う。ともすれば凌也を馬鹿にしているともとれる彼女の言動と行動だが、凌也はもう慣れっこだった。明の意味不明な拳動は無意識である。ここまでくれば脱力こそすれ、怒る気力は湧いてこない。

雨で濡れた道を歩いていくと、結構なサイズのある公園に差し掛かった。小さなアスレチックとブランコ、あとは良く分からないプリン型の小山があり、昼間は少女少女たちで溢れている。

「そうそう。昨日のニュース、お聞きになられた？」

公園前の信号で律儀に足を止めていたところで明の声がかかる。

「何かあったか？」

「この町で急に意識不明になった人間が一晩で十人も出たのよ。そのいずれもが高校生。面白いニュースだと思わない？」

問いかける明の顔は本当に「面白そうな」ものだ。中学時代の同級生の女子と言えば、この手のニュースを聞けば自分の身を案じたり、被害者への無意味な同情を重ねていたが、この少女は違う。被害者を馬鹿にしているのかと思っていたが、どうやらそうではないようだ。真相の掴めない対象を純然と「面白い」と思っているようなのである。

「原因は？」

「不明らしいわ。起き上がってピンピンしていたらしいけれど。興味の尽きない話よね」

「へえ……失神ゲームってヤツかな」

「小学生じゃあるまいし。わざわざ不特定多数の高校生相手に仕掛けるかしら」

のろのろと歩きながら寂れた町の間に行く。手芸店やコンビニがポツポツとある程度で、後は個人宅と集合住宅がまばらにあるだけだ。

道路は所々地面の色が変わっていた。雨で濡れているという理由

ではなく、下水道が何かを修繕したために一部分のコンクリだけ新しいからである。

会話を続けているうちに学校にたどり着く。

明と凌也が通う、都立焦洲第三高等学校だった。

偏差値が低いのは夜間部だけではない。昼間部も大したことはなく、一言で言うなら「金がなく頭の悪い」人間の巣窟である。

駐輪場に乱雑に止められたバイクを見て凌也は表情を歪ませた。ナンバープレートが折れ曲がり、改造されて異常に長くなったマフラーを見ていると、ここが本当に東京都であるのか疑いにくくなる。

もつとも葛飾区、江戸川区、足立区は東京都の中でも「下町」と呼ばれやや特殊な位置に属している。凌也が済んでいる場所からは都心よりも埼玉県や千葉県の方が近い場所なのだ。二十三区というくくりをされながらも、凌也から言わせれば「二十区と問題のある三区」である。

玄関で靴を履き替える。特に「革靴」という縛りはなく、室内用と分けてさえいれば何を履いてもいいことになっていた。もつとも守っているのは半数にも満たなくて、こうした雨の日に廊下を濡らしては生活指導の教員に怒られるのが慣例だった。

明は律儀に履き替える。草鞋わらじという一見するとふざけた靴も、凌也にしてみれば慣れたものである。

「おーっす」

教室に入って適当な挨拶をすると、一人の女性徒が凌也の方へと歩み寄ってきた。

「おー安斉。安斉が遅刻してこないなんて珍しいねえ。雨が止まないわけだ」

「黙ってるよ不良女」

八千草華恋やちぐさかれん。曲者揃いのクラスメイトの中で、明の次に印象の濃い少女だった。

化粧は薄い、小麦色の肌に金色がかった長髪と、一昔前のギャ

ルのような格好をしている。中途半端なルーズソックスは時代錯誤の感が否めないが、本人曰く「流行が私に追いついていないだけ」だそう。外見に反して授業態度は真面目で、一回の遅刻すらない。「分からないよ。これでも意外と純真かもしれない。あんただってパツと見は凶悪殺人犯みたいな顔してるし」

「今朝は鏡を見てきたか？ 週末は渋谷で男漁りって顔してるぞ」

「半ひきこもりのオタクには言われたくないね」

「うっせ。失せろ」

凌也は手を払うジェスチャーをしながら華恋を追い払うが、華恋は意に介さずといった調子でヘラヘラと笑っていた。

「そうだメイ。持って来たよ」

「……あら。ありがとう」

「何のCD？」

興味ありげに身を乗り出した凌也の前で、華恋がちらりと表紙を見せる。

「ゼブラヘッドと、オフスプリングと、sum41」

「知らねえ……」

「洋楽だしね。でもメイがこういうの聞くってのはちょっと意外だな。なんかクラシックとか聞いてそうなイメージだけど」

「こう見えて意外と雑食なのよ」

明の口調は凌也と一對一のときと全く変わらない。基本的に誰が相手であろうと中途半端なお嬢様言葉で喋っていた。貫き通すのは結構だが、人生においてどんなプラス要素があるのか凌也には甚だ疑問だった。

学校の開始を告げる鐘が鳴る。席は四分の一ほどしか埋まっていが、よくある話だった。

「出席を　つてお、安斉がいるのか。珍しいな」

ドアを豪快に開け話して入ってきた男性教員が、凌也の姿を見て声をあげる。

「……最近はそれなりに来てたと思うんですけど」

「はっは。この調子で頑張ってくれよ」

「努力します」

適当な返事をしながら、凌也は気だるそうに机に突っ伏した。

## 瓦解する夜の庭

適当に出席だけ取ると、授業の前に全員が教室から出て行った。この定時制高校では授業の前に食堂で給食があるのだ。

給食が食べられるというのは、服装フリーと並ぶ定時制高校の魅力の一つである。バランスをよく考えて作られた食事は、金曜日だけやや豪華になるのが恒例だった。

中学時代の給食時といえばやらざわついていたと記憶しているが、こと高校に関してはグループらしいグループは未だ形成されていなかった。引っ込み思案な人間が殆どで、明や華恋のようなタイプは非常に少ない。つまりグループを盛り上げたり引っ張ったりする人間が欠けているのである。一緒にいるとややうるさい二人の少女だが、もし彼女達がいなければ給食は葬式のようなテンションで食えることになっていただろう。凌也は口には出さずに感謝した。

「本当に助かったー。昼から何も食べてないんだよねー」

カレーライスを口に運びながら華恋が笑顔を見せる。目はあさつての方向に向けながら、スプーンでニンジンを手づかみしてはスピーディーに凌也の皿に移していた。

「オイコラ！ オイ！ さりげなく俺の方にニンジンを寄越すな！」

「さりげなくない。堂々とやってる」

「なお悪いわ！」

文句を言いながらもニンジンを中心に運ぶ。別に好きなわけではなかったが、わざわざ返すのも面倒だった。

「うーわー。間接キスとか……引くわ」

「ならいれんじゃねえよ！ 何を期待してるんだよ！」

華恋は凌也の突っ込みをあつさりとしるしした。ヒートアップしてきたところで一気に冷ます手法は鮮やかですらある。

「そうそう、聞いた？ 一昨日の午後に駅前でレイプ事件があったらしいよ」



軽い声で華恋がそう述べる。明もだが、大概なのは華恋も同じだった

「いえ。初耳ですわ」

「俺もだ」

「アンタは起きてないんだから当たり前でしょ」

思わぬところで攻撃を食らいながらも凌也はへこたれずに耳を傾ける。

明の「詳細を願えますか」と言葉を受けて、華恋は事の細部について話し始めた。何でも塾帰りの女子高校生二人が、綾野駅前の書店の側でレイプされたらしい。時刻は一昨日の午後九時ごろで、警察もよく動いて調査しているようだが、今のところ目撃証言はゼロとのことだ。

「……誰も見てなかったのかよ」

凌也は声をあげる。綾野駅は足立区の端に位置するが、駅周辺はなかなか栄えていた。随分前の話ではあるが女子高生コンクリート詰め殺人事件が起きた場所である。相変わらず足立区の犯罪発生件数が区内二位のことも含めて、その手の話はたまに取りざたされることがあった。

「ねー。私もそこが不思議なんだけど。ちょっと怖いよね」

「妖怪を犯そうなんて思う奴はいないから安心しろよ」

「黙ってるニート」

「学生だからニートじゃねえ」

「……ごめんね明。この馬鹿のせいで話が逸れて。でもまあ、明は気をつけてよね。見てくれがいいんだから」

「見てくれはいいよな」

「あら、わざわざ『は』に言い換えたのは嫌味かしら」

「クソ……細かい奴だな」

女子二人に半ば踊らされるような状態だった凌也は、不服な態度を表すように鼻を鳴らした。

オンボロの教室に戻ってやたらと簡単な授業を始める。定時の人間が荒らした教室を使わされる全日組は溜まったものではないだろうが、そこは諦めてもらうほかないだろう。

「えー、Xが……」

数学の授業はとても簡単だった。中学校では五段階評価で1しかとったことのない凌也がこの感想を抱くレベルの授業が展開されている。分数や少数の計算、酷いと九九すら怪しい生徒がいるこの学校では、必然的に授業レベルもそうだったものになるのだろう。こんな学校でも努力してそこその大学に入る人間もいるのだから、人生分らないものだと思っていた。

脇の明の方をちらりと盗み見る。

「あら。どうかなさって？ 分からないのなら教えるけれど」

やたらと鋭い明が一瞬にして凌也の視線に気づく。

「いや……流石にわかるわ」

「そう」

そう答えるとまた真剣そうな表情で自習を始めていた。

明は『これで受かるセンター試験』という参考書を開いて、授業などそつちのけで自習をしていた。

こういう姿を見ていると、なぜ卒業まで四年もかかる定時制高校を選択したのか全く疑問だった。

例えば通信制高校ではいけなかったのだろうか。

それに高校など通わずとも明なら高卒検定に受かるだろう。彼女が定時制高校を選択した意図は全く分からなかった。

考えているうちにチャイムが鳴って授業が終わる。腰の曲がった数学教師が、頼りない足取りで教室を後にした。

「なあ、明」

「何かしら」

「どうしてお前はあその高校に来たんだ。ほかにいくところあっただろ。行きたくないなら通信制もあるんだし」

「あら。凄くいまさらな質問ね」

明は妖艶な笑みを浮かべて、右手の人差し指を唇に当てた。彼女が悩んでいるときの癖であることを知っていたが、指摘すると数少ない情報が失われそうなので凌也は黙っていた。

「それを説明するには　私の服装から説明したほうがよさそうね。わたくし  
こっとう和風のロリイタファッション、奇抜な方の多い定時制高校の中でも一際おかしい感じに映るでしょう」

「なんだ、自覚はあるのか」

「それはもちろんありますわ」

「それでも近寄ってくる人間は、何かしらの下心があるのではないかと思います」

「……始めからルームシェア狙いだっただのか？　危ないな……犯されるって話もあり得ない話じゃないだろ」

「私はその気でいたから。若い体を金にしないのは勿体無いと思いませんこと？　一人では何かと出費がかさみますしね」

超然とした様子の明を見て凌也は何の言葉も継げなくなった。行動に脈絡がなく意味不明で　一見すると、何か他の理由があるようにも思えた。

「全くついていけないわ」

凌也は「何かを隠している」ということが予想できてもまず追求することはしない。人間一つぐらい言いたくない事があって確かだし、どうせ聞いたところでカミングアウトしてくれる可能性は低いからだ。

「貴方との出会いは衝撃的でしたのよ。全く見たことのないタイプでしたから」

「そんなもん分かるのかよ……二ヶ月そこそこで、俺がクソ鬼畜ヤローじゃないと判断するのは甘くねえか」

「貴方は時間が止まって透明人間になっても無理やりに犯したりしないように見えますけれど」

意図の読めない推測だった、凌也は適当に返事をした。

「反応も無い状態でセックスするかあ？」

「どうでしょうね。男性の方の心理は分からないわ」

「嘘をつけよ。それを利用してた癖に何言ってるんだ」

「それもそうね」

凌也の指摘に明は楽しそうに笑う。

このときばかりは、彼女の異質さよりも 美しさが際立っているように感じられた。

凌也は華恋たちと別れて帰り道を歩く。午後九時という終了時間のために外は真っ暗であった。凌也はこの暗黒を目にするたびに、この終業時刻は女子生徒にとっては危険ではないかといつも思っていた。夏場でも九時ではかなり暗い。街灯が少ないこともあり、冬にいたっては何も見えないといっても過言ではないだろう。

凌也の右手側には煙草屋が、左手側には駐車場があるくらいであった。煙草屋の電気は点いていて、いつも聞こえているテレビの音声も流れていた。閑散とした駐車場には銀色のワゴン車が一台止まっているだけである。

場に流れている空気は明らかに異質なものである。驚異的なまでの静けさだった。

凌也は足を止めてあたりを見回した。後ろから歩いてきていた明がその背中にぶつかる。

「急に止まらないでくださいまし……」

目を潤ませて鼻を擦っていた明に謝罪をしてから、凌也は疑問を投げかける。

「人が少なすぎやしないか……？」

凌也はここまでの道筋を思い返さずにはいられなかった。学校の校門を出てから公園前の信号に至るまで 確かに、誰一人とも会っていない。

「……私も伝えようか迷っていたところですよ」

二人で背中合わせになつて辺りを見渡す。

「なんだ……？」

長期休暇中であるのならまだ少しは理解できたろう。しかし平日九時に誰一人としていないというのはどうということなのだろうか。

「気のせいでしょう？ 偶然の一言で済ませられると」

明の言葉が途切れた。

「どうした？」

「いえ、何でもないです」

「嘘つけよ」

何事にも動じないといった調子だった明がいつになく怯えるような様子を見せていれば、凌也とて何かあったのだろうという予測はつく。何も言おうとしない明が気になつて辺りを見回して、道路を一つ挟んだ先のコンビニで目が止まる。

カウンターに人がいない。

何が起こっているのか凌也にはさっぱり理解できなかったが、不思議なほど落ち着いていた。

「……行きましょう」

明に手をとられてやや焦ったが、握り返す事はせずにその手を離れた。少し不安そうな顔をした明の表情だけが脳裏に焼きつく。

「ごめんなさいね」

「いや……」

なんとなく微妙な雰囲気になりながらも、家の方へ向けて歩を進める。

手芸洋品店を抜けて、住宅街へ。マンションが立ち並んでいる間を歩いているのにもかかわらず 誰もいない。

心細さからか自然と歩幅が広くなる。明も凌也の方に近づいてきた。

暫くいくと、川を挟んで目の前に公園が見えてくる。登下校の度に目にしているにも関わらず、今日に限ってはやたらと物寂しさを感じさせた。

そこまできて明が声をあげる。

「だれかいらっしゃった」

明が弾んだ声でそう言った。しかし視力が低めの凌也には『誰かの姿が見えなかった。誰かいるのならそれでいいのだが、自分の目でしっかり確認して不安を払拭したかったため、帰り道とは違う方向である公園の方へ近づいていく。』

闇の中 目を凝らさなければ見えないが、確かに人影があった。公園の街灯に照らし出されたその人物は、何か手に持っていた。どうやら小石のようなそれを、空中に放っては手で掴むという動作を繰り返している。

人影の方も自分達に気がついたようだ。なぜだかは知らないが、歩いてこちらに近寄ってきた。立ち去ろうかと思ったが、余りにも明確にこちらに反応してきたので知り合いかとも考えて、結局凌也はその場にとどまる事を選択した。

「よお」

かけられた声は男性のものだ。さらに近づいてきて、その人物少年の顔が見えてくる。

年の程は凌也と同じぐらいだろう。ファッションなのかくしゃくしゃにした茶髪に、青いプラスチックフレームの眼鏡をかけている。口元の薄ら笑いは、どこか人を小馬鹿にしているような印象を与えていた。

「……お前、藤岡か？」

凌也が声をあげる。疑問系で尋ねたものの、目の前の少年は間違はなく中学時代のクラスメイトである藤岡のものだった。

正直なところ接点が多かった相手ではない。苛めに加担している人間ではあるものの、そのくせ臆病であり、大きな不良グループにはゴマをするような人間 分かり易く言つと『屑』である。

「へえ、なかなか可愛いじゃん。細野の奴が騒いでたからどんなのかと思つたら……これは」

急に明の容姿について言及してきた藤岡を凌也は思い切り睨みつ

けた。前々からわけのわからない奴だとは思っていたものの、第一声が容姿の値踏みとは予想以上の屑であった。

「あら、私ですか。ありがとうございます」

下卑な言葉を投げかけられても明は飄々とした態度を崩さない。

藤岡の方はといえば、面白い相手だとばかりに口元に笑みを浮かべていた。

凌也は思わず明の手を握って一歩引かせる。明が不思議そうな顔をするが、凌也自身も殆ど反射的にとった行動であるために言葉が続かない。

「どうしたんだよ」

藤岡の声はそれだけで凌也をキレさせかねない不快さがあつたが、明も居る手前面倒ごとを起こすわけにはいかないと思い直す。

「いや。なんでもない」

明の手を離れた瞬間、藤岡が笑った。

「受け取ってくれよ」

藤岡がこちらに向けた手が光る。

「伏せて！」

明が叫び声とともに凌也を突き飛ばした。藤岡が放り投げた石ころが凌也の右足に当たる。

続けて二人の間をロケット花火のようなものが突き抜けていく。

一瞬の出来事を捉え切れなかった。凌也に理解できたのは、藤岡がこちらに何かをしてきたということと、自分が明のお陰で救われたらしいということだった。

「なあ お前らも異能持つてんだろ？ 二人で固まってるあたり、まだ別のヤツもいるのか？」

「ハア？ 何の話」

足元が爆ぜる。

今度はしっかりと目で捉える事ができた。藤岡の指先が光ったかと思うと、そこからロケット花火のようなものが飛来してきたのだ。呆然としながらも何とか立ち上がった凌也を見て、藤岡が笑い声

をたてた。

「なんだお前ら。使い方わかってねえのかよ」

藤岡はヘラヘラして立っているだけだった。

「なあ、諦めようぜ」

藤岡の言葉に言い返そうとした凌也だったが、その体が急に前に倒れこんだ。何かとと思っていると倒れた凌也の上を炎の弾が突き抜けていった。

「突っ立ってない！」

明の叫び声が聞こえる。顔だけはなんとか上げること成功したものの、胸を思い切り地面に打ちつけてしまった。

「つてえ……」

素早く立ち上がって状況を確認する。もう一発飛来してきたそれを回避して 驚愕の事実を目にした。

藤岡の火の弾があたった場所が、実銃でも撃ったかのように抉り飛ばされていた。

ここまでできてやっと凌也は事態の深刻さを確認する。

「立って！ 逃げますわよ！」

「どこにだよ！」

「知りません！ 突っ立つてるだけなら的ではなくって！」

運動会で使うような号砲が何発か響いた。背後を振り向いて弾道を読みながら、迫り来る藤岡と距離を取る。

いつもの帰り道の直線道ではまずい。凌也がそれを伝えるよりも速く、明は凌也の手を引いて入り組んだ市街地の方へと向かった。

恐怖が全身を支配していた。理解不能で出鱈目で意味不明な攻撃に襲われながら理性的でいるというのが無理な話だ。

「オイなんだよ…… 本当に素人か！」

一発が凌也の右腕を捉えた。ハンマーで叩かれたような鈍い痛みと、煙草を押し付けられたような熱が走る。

凌也は悲鳴こそあげなかったが、痛みで体を硬直させたせいでつ



まずいた。手を引いてくれていた明を巻き込んで地面に倒れこむ。

「……なんだ、味気ないな」

つまらなそうにそういった藤岡が、手をこちらの方に向けてきていた。

「じゃあな」

別れの言葉を言いかけた藤岡の体が派手に吹き飛ばされる。金属にぶち当たるけたたましい音がしたと思ったときには、公園のフェンスに激突した藤岡が呻いているところだった。

「大丈夫か？」

そう声をかけてきた人物は、中学生時代の同級生であり、凌也の数少ない親友の一人であった。

大蔵雄斗。

細く鋭い目と、口元以外は変化に乏しい顔。身長は凌也よりも低い、かなりやせ気味の彼とは違って体格は良い。

その手に持っている物はおおよそ凌也の想像を超えていた。

檻とボウル    あえて言葉で表現するならそれが適切だろう。右手には正方形の檻    動物を飼うようなケージを巨大化したようなものが握られていた。左手には楕円のボウルである。双方とも人間が十人は入れそうなほど巨大なサイズを誇っている。

「て、めえ……」

呻きながら藤岡が手をあげた。指の先が光る。

「藤木！ 下がれ！」

怒号に答えて凌也は一步下がる。破裂音とともに放たれた五発の炎弾を、雄斗が左手のボウルで受け止める。

「らあ！」

藤岡の手からさらに五発の火弾が飛び出した。ワンパターンに見えて、きつちり狙う場所を変えて対応をしにくくしているあたりは彼の狡猾さなのだろう。

雄斗は右手の檻を敵の方へなげつけながら、ボウルを目の前に構えた。全弾が大きなボウルの中で弾け飛ぶ。

次弾を撃つモーションをしていた藤岡は追撃を諦めて檻を回避する。蔵元が右手のボウルを持って藤岡の方へと駆ける。

正方形の檻を回収した瞬間、右手の檻を投げつけた。強烈なスピードで空を飛んでいくボウルを、藤岡はギリギリのところで回避する。

「畜生っ」

藤岡はそれだけ言い残すと手からまた弾を出した。雄斗が飛び上がって回避しているのを尻目に、全力で撤退を開始する。

雄斗は何も言わずにその背を追って駆け出した。後には凌也と明だけが取り残される。

二者の表情はいつもどおりとは言いがたかった。明はいつもより少しだけ固い顔をして腕を組んでおり、凌也は眉根に皺を寄せその目に明確な怒りを湛え、歯軋りを一つした。

## 利口なやりかた

「……何だっって言っただよ！」

凌也は近くにあった木に拳を叩きつける。低い位置にある枝が揺れて、木の葉が擦れあう僅かな音が鳴った。

幹には傷一つつかなかったが、凌也の拳からは血が滲んだ。それでも怒りが収まらないのか、もう一発を

雄斗の姿が消えてから五分、凌也は同じような悪態を突きながら物に当り散らしていた。凌也自身、自分の感情が何に対してのものなのかは分かっている。藤岡への憎悪が一番とはいえ、彼が何をしてきたか理解できないもどかしさが凌也の怒りを加速させていた。落ち着いたほうがよろしくてよ

「お前……殺されかけたんだぞ！」

「でも別に殺されてはいないわ。二人とも無傷のまま。ここだけのシナリオを切り取るのなら、ハッピーエンドでしょう」

「ふざけてんのか！」

怒鳴った凌也の頬を明が叩いた。

「つてえな！」

叩くといつてもほんの軽くではあったものの、凌也は必要以上に反応をした。自分で思っている以上に気が立っているのには気づいていたが、それを抑えることができなかった。

「冷静になりなさいな。感情に任せたって何の解決にもならないわ」「解決手段が無いから荒れるんだろ！」

「もう少し大人の方が好みでしてよ」

「どうしてお前はそんなに余裕でいられる!?」

「地雷や疫病でこの年まで生きられない人間なんて幾らでもいるでしょう。訳のわからない同年代の人間に襲われたところで、別段不

幸だとは感じませんわ」

スケールの大き過ぎる話に凌也は啞然とする。

明はいつもどおり 下手をすると普段より更に冷静に振舞っていた。その姿を見ているうちに、不思議とヒートアップしていた感情が納まってきた。

「例えば、今みたいな非現実だって、一度経験した以上は対応がしやすくなるでしょう。次は生き残れる確立が上がるかもしれません」

淡淡とした言葉に凌也は何も返せなかった。感情論でしかない自分の言葉に比べると、明の言っている事は非常に理論的だ。この状態で合理的思考能力に陰りが見えない黒木明という存在を前に、凌也も徐々に冷静さを取り戻していく。

「……わりい」

「今貴方がするべきことは……例えば、友人たちに電話をかけてみるというのはどうでしょうか」

言われて凌也ははっとなる。

果たして周りの人間は無事なのだろうか 確かにそこは第一に意識を向けなければならないことだった。

凌也はメモリーに入っている相手に片っ端から連絡を入れていく。いつもは一回かければ一時間、二時間、果ては三時間という長話も頻発する凌也だったが、今日に限っては適当に二、三言かわしただけで切っていた。

友人たちは焦り気味の凌也の様子に驚いたり呆れたりという反応を返す。自分のことも知らずに という腹立たしさが湧いてきたものの、それを向ける矛先として友人達が不適當なことに気がついて感情を抑えた。

「……お前はいいのか」

一通りかけ終わった凌也は、いつもと変わらない顔をして突っ立っていた明を見て顔をしかめる。

「私？ そうね。一番心配な相手がいますけど……」

明がそういったところで凌也の携帯の着信音が鳴る。

タイミングがタイミングなので焦って携帯を取り出した。ナンバ―も確認せずに通話ボタンを押す。

「もしもし!」

「私ですわ」

隣の明が携帯電話を取り出して耳にあてていた。どうやらポケットの中でボタンを押したらしい。

ふざけているとしか思えない行為は、怒りを通り越して凌也を脱力させていた。明は悪びれた様子もなく小さな声をあげて笑う。

「はあ……」

「元気をお出しになって。悩んでいてもしょうがありません」

「最後のでどつと疲れたんだよ　そうだ、華恋」

「華恋には貴方が電話をしている最中にかけておいたわ。なんともなかった、とのことよ」

明はそれだけ言うつと、まるで何も起きなかったかのように平然とした足取りで出入口の方へと歩を進める。凌也もどこか釈然としないうものを抱えながらも、悩んでいても仕方がないという明の台詞を思い出してか何も言わずにその後を追った。

白魚公園にあるアスレチック遊具の影から一人の少年が姿を現した。身長は凌也と同程度に思われたが、引き締まった体躯は彼がスポーツマンであることを想像させる。

身に纏っている制服は都立最高の進学校である比津谷高校のものであり、その少年が頭も優れていることが伺えた。

少年は炎弾が命中したあたりの地面をしげしげと観察していた。地に刻まれている無数の弾痕を見ると、あの炎弾は見かけ倒しではない殺傷能力を持っているのだらうと推測した。

暫くの間を置いて少年は視点を上げた。眼鏡が月明かりを受けて

きらりと光る。理知的で引き締まった顔をした少年の視点は月、あるいはまばらに散っている星を捉えてはいなかった。彼の目の先にあるのは茫洋と広がる暗黒の空だけであり、もし誰かが今の彼を見ればその行為を疑問に思うことだろう。

出入口の方へと歩こうとして、その途中にあるブランコの座るか否かで逡巡を見せた後、少年　河島幹久はゆっくりとブランコに腰掛ける。

錆付いた鎖が軋んだ音を鳴らす。幹久は何ら気にした様子はなく、ブランコの上で一人思索に耽っていた。戦っていたのは藤岡翔太と安斉凌也だろうと予想をつけている。幹久はその後に来たのが大蔵雄斗であることも知っていた。凌也と一緒にいた少女は見たことのない顔だったが、それ以外の三人は他ならぬ中学時代のクラスメイトである。

幹久が巻き込まれたのはもう一週間も前のことである。珍妙ではあるが強烈な『異能』を知ってからというもの、とにかく大事に発展しないようにと祈り続けてきたが、どうやら神には届かなかったらしい。

首に冷たいものを感じて首を動かして天を仰ぐ。眼鏡にポツリと落ちた一滴を皮切りに小雨が降り始めた。

「雨か」

呟く声は忌々しげな響きを伴っていた。学生鞆の中にあるプリントと参考書が濡れることを嫌った少年は、静かにブランコから立ち上がって家の方を目指し始める。

歩きながら少年が考えていたことは　自分はその場に介入するべきだったのだろうか、という疑問であった。

幹久は自分に能力が備わっていることを良く知っていた。行使すれば襲われていた凌也たちを救うことはそう難しくは無かったのだろう。

しかし幹久はそれを躊躇い、結局黙って戦闘を眺めていただけだった。

地面が挟れるような弾丸の前に身を投じるのはリスクの高さを感じた上に、何よりどちらが「多数派」なのかも分からない。藤岡はあれでグループを作るのを好むタイプである。彼を中心にしたならず者の集まりが形成されていると仮定したとき、わざわざ他人を助ける事でそれと敵対することは大きな負債を抱え込むことになりかねない。

つまらない発想に自嘲の笑みを浮かべようとしたものの、口角を吊り上げる気力すら湧いてこなかった。

他人の不幸に目を瞑ったのはこれが始めてではない。

先日起きた女子高校生のレイプ事件も、藤岡やその仲間たちが何かをしでかすであろうという予想はついていていた。自分が妨害をしたところで別の標的が狙われるだけであるという諦念と、今回と同じように自分がターゲットにされてしまうのではないかという懸念があった。仮に現場を目撃していたとしたら介入していた気もするが、逆にそれだけ切羽詰った状況で無い限りは流してしまおうと思っっている自分がいた。

そこまで考えて幹久は思考を停止した。

狂気の沙汰が発生していながらも、自分の中にはいつもと同じ計算的で狡猾な姿を覗き見ることができた。幼い頃はヒーローを夢見たこともあったが、超常現象が引き起こせる上にやろうと思えば人を救える状況になった今はどうか。自らを危険に晒す気など全く無く、第一に考えているのは保身の二文字でしかなかった。

何もかも平穩に過ぎればいい。

そう思いながら幹久は足元の小石を蹴り飛ばす。

綺麗な放物線を描いて飛んだ石は、公園の側にある川に落ちる。控えめな水音が幹久の耳の中に残っていた。

## 停滞を望む者

足の痛みに耐えながら、やっとのことでアパートに辿り着いたときには、すぐにでも自室に引っ込んで布団の上に身を投げ出したい気分であった。しかしまずは明と会話がしたかった凌也は、靴を脱ぐなりフローリングの床に倒れこんだ。

テーブルを支えにして立ち上がり、いつも食事のときに座る椅子に腰掛ける。薄い木の背もたれに全体重を預けながら、足に負担がかからない体勢を整えた。

明は凌也の前に腰掛けた。彼女の表情に疲労の色はなく、焦点の合わない瞳でぼうつと虚空を見つめていた。

「なあ……さつきは悪かったな。ごめん」

頭を下げる代わりに会釈を一つした。凌也の言葉に明が微笑む。

「気にしてませんわ。私こそ、急に叩いたりしてごめんなさいね」  
「……いや。悪いな」

もともと凌也はそう気が長いほうではない。激情してしまったのは状況が理解できなかったこと、藤岡を嫌っていたことの二つである。自分が冷静になるべき状況であったのにも関わらず、冷静だった明に逆上してしまったことが彼の幼さを如実に示していた。

「お前、どうしてあんなに素早く動けたんだ」

「動かないと死んでいたでしょう？ 結果を見通した上で逆算したときに、四の五の言わずに逃げるしかないと思ったんです」

「凄いな」

「そうかしら？ お褒めに預かり光栄ですわ」

やはり明には余裕があった。雄斗や藤岡らも平然と戦っていたが、凌也には理解できなかった。二人はこれまでもこの奇妙な能力を使ったことがあったように見えたが、自分達は始めてである。同じ状況下でこうも差がでるものかと驚きながら、改めて黒木明の図太



さを知ることになった。

そこでインターホンが鳴る。

凌也は心音が直接鼓膜に響いてくるのを感じていた。家の場所を教えているのはごくごく親しい友人だけであるが、さきほどの襲撃を経た後では平常心を保つのが難しい。

「……私が行きましようか？」

明がそういったところで凌也の携帯が鳴り響く。着信メロディに驚いて腰を浮かせながら、ポケットから取り出した携帯電話を開いて耳に当てた。

「もしもし」

『安斉、蔵本だ。ドア開けてくれるか』

救世主 雄斗の声を聞いて凌也はドアの方へと駆けつけた。

「……よお、安斉」

ドアを開けてみれば、疲れきった顔をした大蔵が現れた。どうやらあの後藤岡を追っていたらしい。

「見失ったのか？」

雄斗は静かに頷いて溜息を一つ。凌也が自分の席に誘導するより早く、立ち上がった明がキッチンで煎茶を淹れ始めていた。

「なあ、大蔵君。何か知ってるんだろ」

「俺も大したことは知らない。二人が巻き込まれたのはいつだ？」

「巻き込まれた、ってのはさっきの出来事みたいなことだよな。今日の帰り道で偶然巻き込まれたただけだ。あいつの口ぶりからすると、今日が始めてじゃなさそうだけだな」

「なるほどね。どこから話すべきかな」

雄斗は目を閉じて悩むような素振りを見せてから、テーブルに乗り出して口を開く。

「俺が知ってるのは一週間ぐらい前からだな。本屋に居たら急に人が消えたんだ」

「どういうことだ？」

「説明のしようもない 午後七時ごろだったかな。その場にいた

客や店員が急に『消えた』んだ。明かりはついたまま、忽然と」

雄斗の言っていることが真実らしいことは凌也にもよく分かった。この手の悪質な冗談を仕掛けてくるタイプではないし、何より自分たちが下校時に誰ともすれ違わなかったことの説明にもなる。

「それから？」

「ああ。外に出たら あいつがいた。正確にはあいつらだ。藤岡ともう一人の男子が二人で女子を追っかけてた。訳が分からなくて何も出来なかったんだけど、その次の日あたりに不思議な力を使えることに気がついたんだ」

「何のために襲ったり」

凌也が言葉を切った。簡単だ。襲うために襲っているのだ。

「……私も危なかったということかしら」

苦虫でも噛み潰したような顔の凌也とは対照的に、明の表情には不敵な笑みが宿っている。場の雰囲気にも話の内容にもそぐわない気色を見て凌也が顔をしかめた。

「お前、どうしてそんなに余裕なんだよ」

「ごめんなさい。状況が絶望的で笑うことしかできなくて。まず第一に私たちには反撃するための力がないわ。手から出した炎の弾で人を傷つけてはいけないという法律はないし、何より人が消えている状況では助けも呼べない 雄斗さん、この不思議な時間は、毎日定期的に訪れているの？」

「若干のズレはあるけど、最近は九時半ごろから十時ごろの間に起きている。力を使えるのはそれから一時間ぐらいの間だけだ。一定時間が過ぎると、消えていた人間も現れるし、力も使えなくなる」

「そうですか。仮にデッド・タイムとでも呼んでおこうかしら。名称があった方が意思疎通がし易いわ」

凌也は物騒な名称に明のセンスを疑ったが、かといって明るくフアンシーに呼べるような代物ではない。しかし発生する時間が一定であるというのならば、建築物内に籠もってやり過ごすことも可能だろう。

「とにかく力を使えないんだろ？　なら別行動は危険過ぎる。次のデッド・タイムからはなるべく合流しよう」

「電話入れればいいか？」

「ああ。電話は普通に使えるみたいだからな」

「私も教えてもらってもいいかしら」

「どうぞ」

赤外線で雄斗と明が番号を交換するのを見ながら、凌也は一つ思い浮かんだ事を口にする。

「地球上どこもかしこもこんなことになってるのか？」

「高校のダチに力を使える奴が一人いてね。そいつがある程度この地域から離れると使えないってわめていたよ。一度試してみたけど、ある程度離ればデッド・タイムには巻き込まれなかった。でもどうする？　いつまで続くか分からないのに、外でずっと暮らせる金があるわけでもなし」

「……それは」

「こんなときにも私たちはお金に縛られるのね。なかなか難儀なものですわ」

明の表情は底抜けに明るかった。どこか背中が寒くなるのを感じつつ、凌也は雄斗に質問をした。

「なあ大蔵君。能力ってどうすりゃ使えるんだ？」

「自然と使える筈だけど。俺も始めだけちょっと悩んだけど、後は普通に使えてる」

「……ノウハウも何もないの？」

「ないな。能力使ってる奴には何人が合ったけど、特に教わるでもなく使いこなしてた。それに同じ能力っていうのは見たことがないから、教えるってことはできないんじゃないか。良く分からないけど」

淡々と語る言葉に嘘はないだろう。凌也は顔をあげて、前方にすわる少女を見つめる。

「明。使えそうか？」

「いいえ。全く」

「さつきも言っただけど俺も初日は使えなかった。そんなものがあるとも知らなかったし。まあ、明日辺りには使えるようになるだろう」  
無意味だとは知りつつも、凌也は自分の手のひらを見つめて空中で指揮でもするように動かした。雄斗がそれを見て小さく笑う。

「……とりあえず今日は遅いから帰るよ。高校が終わる頃に、俺も外に出てるから」

「室内に居た方が安全じゃないのか？」

「学校やこの家の場所が割れるよりはマシじゃないのか」

雄斗の言葉に凌也は押し黙った。それから二言三言挨拶をかわして彼と別れる。

「わけわかんねえぞ……」

「私も何一つとして理解できていませんわ」

凌也はまだ暖かいお茶を静かに飲み下す。初夏にしてはやたらと涼しい風がダイニングを通り抜けていった。

## 血と眼

閑散とした夜の街にバイクのエンジン音が響き渡る。闇に飲まれることなく自己主張を続ける真っ赤なドウカティから降りた女は、胸元の方に流れたブロードヘアーを背中側にかき上げた。

愛車と同じカラーをしたライダースーツは胸元の半ばまでファスナーを下げていた。東洋人ではまず見かけないサイズの胸は、それでも窮屈そうに張り出している。

「……ここか」

闇夜の中で女は声をあげる。彼女の目の前にある建造物は古びた病院であり、数年前に閉鎖されて以来放置が続いている物件であった。四階建ての病院の外壁には蔦が這い回り、スプレーの落書きが踊り、またほとんどの窓ガラスが割られてしまっていた。

女が持っている情報によれば異能研究施設としての側面を持っていたはずの病院であるものの、平然と人目に晒されている状況を見る限り、病院にはもはや何の情報も残っていないように思われた。地下施設という可能性はあり得ないわけではないが、カモフラージュ用の建築物として病院を建てたのだとしたら頭が悪いと言わざるを得なかった。ばれないようにするのであれば、誰も居ない平地の下に地下室を作った方が余程よい。

「この病院にはもう何も残っていないと思いますよ」

流暢なイギリス英語を投げ掛けられて女性足は止めた。振り返って見れば、星空を背負うように一人の少年が立っている。

「誰だ」

忌々しさを感じて語調が尖る。奇襲に備えて万全の注意を払っていたという自負が折られ僅かながら動転したが、すぐさま冷静さを取り戻して少年の方に目を向ける。

「この国のしがない能力者の一人です」

道路にある切れかけたライトの光を頼りにその顔を伺った。十四、五ほどの年齢に見えるその顔は中性的で凜々しく、顔つきは東洋人系でありながら肌は西洋人のように白い。一見すると少女のようにも見えたが、声のトーンや服装から判断すると男性なのだろう。黒いナポレオンジャケットには大きな銀ボタンが幾つかついており、スラックスから伸びていくラインは女性のように細い。鋭く尖ったスニーカーの先が、光を反射して輝いていた。

襲撃者にしては殺気が感じられなかった。女は彼が政府の回しものであるだろうと推測をつける。

「政府は何をしている？ 日本は優秀な対異能課があるはずだろう？」

「正直なところ、今回の事件で形成された結界はまともなものではないようです。ナチス・ドイツの残党とヴァチカンの監査団が行方不明になっているのはご存じですか。どうもそれを見て対策本部は躊躇っているらしい。無用な犠牲を払うくらいならば、なかったことにして街が一つ滅びてしまった方が楽なんでしょう」

淡淡とした口調からは感情が読み取れなかった。政府への批判もなければ状況に対する諦念もなく、少年の瞳がどこを捉えているのかすら分らない。

「馬鹿どもめ……。国民を救うことが大義ではなかったのか」

「あの結界は外部からの攻撃を耐えるのに特化しています。その結果、内部の能力者は大した能力を得られていないはずです。だから僕たちは外部への侵食を防ぐことにしました。今あの結界を解除したら、内部の能力者たちが街の外に出て行く可能性がある。逆に言えば、中に入ろうと思うだけなら能力を放棄すればいい。しかし能力者の方は、能力が使えないのであれば自分たちの責任ではないということです。かといって異能絡みの事件で警察や自衛隊が動くわけもなく……。なすりつけ合いの果てに、何もできず海外頼みです」

女は日本政府の対応の甘さと、何より能力者たちの危機感のなさに齒噛みしていた。そして至極当然な疑問を一つ投げ掛ける。

「それで少年、全てを知っている君は何物だ」

「神野燎太」

仮面のような無表情を決め込んでいた女の表情が溶ける。心臓が跳ねたのは圧倒的な力を目の前にしての恐怖からであった。

能力者同士は基本的に干渉を好むため、他人の名前を知っているものは少ない。よほど圧倒的な能力を持っていない限り、見知らぬ能力者の名前など知れ渡ることにはなかった。

つまり目の前の少年はそういうレベルの人間である。女の記憶が正しければ、日本国内だけでなく世界レベルで見ても十人といないような能力者である筈だった。

「傍観者……か。二つ名の通りに行動しているのか？ 君ならば、やろうと思えば全てをその手で解決することも可能なはずだ。それに君のレベルの能力者が若年層に何人もいることはリサーチしている」

「異能根源があつたのはなにもあの街だけではなかった。……僕は他に同じ状態に陥りそうな土地を守るのに精一杯だった」

燎太と名乗った少年は間髪入れずにそう答えた。仮に政府関係者であれば守秘しなければならぬような情報を、躊躇うことなく女に伝えていた。

「あと何力所あるのだ」

「二十二万三千七百四十三ヶ所」

「……………事実か？」

これまで何百人という数の能力者と戦ってきた女の反応が鈍る。

もちろん女も神野燎太という少年の名前は何度も聞いたことがある。曰く、地球の裏側で飛んでいる一匹の蚊のDNAを『目視する』ことができる能力者で 同業者の中では『神眼』と呼ばれていた。

伝説の一種だろうと考えて話半分に信じていたが、どうやら目の前の少年がふざけている様子はない。仮に地球上の好きな場所を見ることができる眼を持っているとすれば、どんな情報を持っていたもまったく不思議ではなかった。

「ごくごく小さな可能性のものも含めるとそうなります」

「どうやら、私の想像していたスケールとは違うようだ」

「いいえ、恐らくあっていますよ。少なくとも葛飾区や足立区に起きている閉鎖空間の中では、超低級の能力者がほとんど喧嘩に近い戦いを強要されているはずです。下手をすれば、無能力者対能力者の構図すらあり得えます。他の二十二ヶ所は守れていますが、そちらが手一杯で東京の東端に手を出せる余裕がないんですよ」

「君たちが直接力を行使すればいいだろう」

「…………… 蟻と蟻が争っているところに核兵器を持ち出したらどうなると思いますか」

一瞬の躊躇いの後に燎太が漏らした声を聞いて女はその意味するところを理解した。つまり些事に干渉してはいけない能力者なのだろう。

「歯痒いな。君のような能力者が、直接力を行使できないとは」

「…………… ほんの少しだけ、理性的になれば今回の事件も起きなかったと思います」

「わざわざ私の前に現れてきたのはそういうことか。それで、細かい情報はどうする？ 立ち話で済ませるか」

「データで良いのであればここに」

「構わない」

燎太はポケットからフラッシュメモリを取り出して女へと放る。

女はそれをポケットにしまい込みながら、廃病院を後にしようとバイクの方へ爪先を向けた。

「一つだけいいですか。能力についてです」

アマーリアは背中を向けたまま、首だけを横に向けて頷いた。

「あの結界の中での能力付与は、他に例を見ない特殊なものになっています。単純に関わった人間全てに付与するのではなく、そうですね、自然発生的な能力者がそうであるように、個人の精神的な動きが大きく関わっています」

「…………… いまいち掴めないな」



「停滞を望む者には檻を。目立ちたいなら花火、蹂躪したいのであれば力。そういう単純な能力は恐らく自らの思想と食い違うこともないはずで、だからこそすぐに使えるようになるはずです。……問題はもつと複雑なものや、その能力根源が自分の欠点や美点だと認められない場合です」

「勇猛さと短気を取り換え、慎重さと臆病さを取り換える　そう  
いうことか？」

「はい。もちろん勇猛な者はそういう能力がつくでしょう。ですが本当にそんな者はごくごく少数だ。その多くは自己主張が強いだけか、偽善を通して自分を慰めているか、あるいは気が短いか、それともただ力があるだけか、です」

「……能力と精神の関係についての論には疑心暗記だったが、どうも君の話を聞いていると間違っていないように思えてきた。ならば私は、人の足を絡め取ることが根源だろう」

「誰しも、綺麗な者じゃないですよ」

「君は何だ」

「僕は……盗み見ることに、ですね。この世の全てを見たい。聞きたい。しかし手を出す力は放棄した」

「君にとつては地球の裏側で死に行く人間も『目の前で死んだ人間』なのか」

「ええ。ですから僕は、望んだにもかかわらずその目を半分閉じている。願わくば、目の前の一人を確実に救えるだけの力を備えたかったものです　ふがいなさを謝らせて頂きたい」

「構わないさ。ただ、君の方が、辛そうだな」

力を持ってもそれを行使できるとは限らない。大きすぎる力は破滅を呼ぶと言うが、燎太はまさしくそうなのだろう。女はそう判断してそれ以上の追求を避けた。

「アリーヴェテルチ。スイニヨリーナ、アマーリア・カルディナーレ」

別れの挨拶をした少年の体が揺らいだ。その体が陽炎のように揺

らいだかと思うと、背景と同化するようにして色が薄れていった。  
女　アマーリアはその場に立ち尽くす。

思いも寄らぬ所で手渡されたバトンの意味は理解できていない。  
ただ、仕事意識を越えた感情が芽生えているのも確かであった。

## 黒い女

七月四日 金曜日

凌也が熟睡していたところに不愉快な金属音が飛び込んできた。驚いて布団から飛び上がった凌也の視界に笑顔の明が飛び込んでくる。異音の原因は彼女が頭上で打ち鳴らしているおたまと鍋である。「おはようございます。よく眠れました?」

「いや。全く眠れなかったよ」

あえて鍋とお玉に突っ込みはいれず、凌也は寝ぼけ眼を擦りながら時計を確認する。時刻は午前九時だった。いつもならありえない起床時刻ではあるが、昨日は結局何もする気が起きずにさっさと寝てしまったので、睡眠時間として考えるなら適切だろう。

明はいつもの黒っぽいドレス系の服より動きやすそうな服を纏っていた。白い布地に彼岸花が咲き誇り、彼女の頭の上にもいつもと同じように一輪咲いていた。

端が軽く膝上のスカートからはすらりとした生足が伸びている。浴衣のような普段着を身につけているときでさえスタイルの良さがわかる程である。出会った頃感じていた痛々しさは最早無く、慣れた今になっては扇情的かつ芸術性を兼ね備えた「美」を確かに感じていた。

「それで朝っぱらからどうしたんだよ。その鍋で味噌汁でも作るのか?」

「いえ。買い物に行こうと思ったのでそのお誘いを」

「何だ、服か何かか」

「何を言っているんです。護身用具に決まっていますでしょう。また

昨日みたいなことになったときに丸腰じゃあ何もできませんからね」  
明の言葉の意味を理解した凌也だったが、じゃあそうしようという返事はできなかった。手から弾丸を飛ばしてくるような化物相手に何を使って挑むというのだろうか。そもそも戦うという選択肢を選ぶには荷が重過ぎる相手だと思っていた。

「お前、戦うつもりかよ」

「大蔵君一人に任せるわけにもいかないでしょう。積極的に攻撃する戦力は私も欲してないですが、消極的に応戦するだけの戦力は必要だと思いませんこと」

戦うためではなく逃げるための力。つまりはそういうことなのだろう。明の言葉が合理的であることは理解したが、それでも返答は躊躇った。昨日の一件に対する恐怖も理由の一つではあるが、何よりもともと怠惰な性分が根付いてしまっている。戦いを連想させるものに触れなくなかったのである。

「外出はあいつらと会う可能性があるんじゃないかねえの」

「まさか、ずっと出ないという訳にもいかないでしょう？ どうせ襲われるのなら、視認性の悪い夜間より日中の方がいいですわ。それに大蔵君のおっしゃっていたことが正しければ、彼等もまたデッド・タイム中にしか攻撃ができないはずです」

「……まあ、仮に能力を使えるにしても人目につくしな。じゃあ飯喰ったら出よう。夕方になる前に帰り着いた方が安全そうだからな」  
「ええ。ですのでさっさと食べてしまってください」

「わかった」

凌也はハンドスプリングで起き上がりとして頭からベッドに落下し、明に白い目をされながら部屋を出て食卓へと向かった。

朝食を取り終えた凌也たちは、国道沿いに自転車をこいでホームセンターへと向かった。車での利用客が多いからなのか、両側には大型の家電量販店やリサイクルショップなどが立ち並んでいる。凌

也も近所のゲームセンターにないゲームをするために国道沿いのゲームセンターに来る事がたまにあった。

「あつついな……お前、大丈夫なの？」

「ええ。何ともないですわ」

明は汗一つかかずに自転車飛ばしていた。暑苦しい服装が目に入るたび、凌也は自分の体温が上がっていくのを感じていた。

三十分ほどでホームセンターにたどり着く。凌也には日曜大工やガーデニングの趣味はなく、ホームセンターなど一度も立ち寄ったことがなかったため、見るもの全てが新鮮に映っていた。

「植物が売ってるのか」

「サボテンでも買っていきましょうか」

「花じゃなくていいのか」

「花はすぐ枯れてしまうじゃない」

「そういうもんか」

ポリタンク詰めの農薬や巨大なプランターは小学校の校庭で見たことがあるものだった。面倒なので参加はしていなかったものの、栽培委員の友人が熱心に管理をしていたことを思い出す。

「早く中に入りましょうよ」

「すまんすまん」

ふくれっ面の明に手を引かれてホームセンターの中に足を踏み入れる。体育館のような場所に様々な物品が並んでいた。

「護身用具って、具体的に何買うの？」

農具用品コーナーへと足を進める明の背中に言葉を投げ掛ける。

「そうねえ。例えば、これとか」

明はフックに引っかかっていた折りたたみ式のスコップを手にとった。アメリカ陸軍が採用しているスコップで、農業から災害時まで幅広く使えるという説明が書いてある。

「貧弱な感じがするけど」

「でもあまり大きな物は持てないでしょう……たしかにこういうものもありますけれど」

明は振り返って違う棚の方へと歩み寄り、壁にたてかけてあった斧を掴む。一メートルほどの柄の先には分厚い刃が取り付けられており、女にしては力のある明がふらついていたことからその重量が理解出来た。

「首はともかく、腕や足なら落とせそうだな。あの火の弾をかわしながら当たるのは難しそうだけどさ」

「打撃武器はまあおいておきましょう。戦うためではなく、逃げるための武器を探さない」と

明は凌也に背を向けると早歩きで動き出す。少しはデート気分も味わえるかと思っていた凌也だったが、今の明には欠片ほどの配慮も色気も存在していなかった。遊び道具を見つけた子供のような目で物色を続ける様は、どう見ても昨日の戦闘を重く受け止めているようには見えなかった。

その後も明の後ろ姿を眺めながら後に続く。自分が秋葉原でゲームやパソコンを物色するときの目に似ていることを感じながら、凌也はカゴに投げ込まれたカセットコンロ用ボンベを見て怪訝な表情をする。

金属製のカゴの内容物が徐々に増えていく。首の短いビン、ワイヤー、マツチに花火、粘着テープ　おおよそ凌也には使用法が分からないが、少なくとも安全で楽しいものが生み出される材料でないことは理解できた。

「凌也さん、喧嘩はお強いほう？」

「……どうだかな。そんなにたくさんはしてねえし」

小学生や中学生の頃、キレていきなり殴りかかった経験が何度かあったものの、正面から喧嘩をした経験はほとんどなかった。高校に入ってから喧嘩をするほど人と接しておらず、また殴って解決という手段が馬鹿げていることに気づき始めたためこれからもすることはないだろうと思っていた。

「とりあえず、何か武器があったほうがよくつてよ」

「あー……コレとかか」

一メートル五十センチはある巨大なバールを手にするが、そのあまりの重さに驚いた。先ほどの明の斧に匹敵するだろう。

「無理だな……じゃあこっちだ」

一メートル三十センチのものを選ぶが、やはりまだ重い。

「なぜバールに拘ってるんです」

「いや、シンプルに強そうだろ」

「もっといいものがありましたよ」

そういつて明につれられてきた先で凌也が見たものは、立派な大鉦だった。

握り柄の先には五十センチはあろうかという巨大な刃がついている。黒く厚い刃は見るからに危険そうで、対して力を入れずとも重量だけでいろいろなものが切り落とせそうであった。

「これを思い切り首めがけて　あら、どうして戻しましたの」

「流石にこれは危険すぎるだろ……」

間違いなく首が吹き飛ぶだろう。なにより、こんな重いものをずつと振り回しているのは不可能に思えた。

その後も明は幾つかの賞品を見繕っていった。店員さんながらに商品説明をする明に苦笑しつつ、帰りがけに観葉植物のポットなどを購入して帰路についた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0809m/>

---

愚者に捧げる狂い花

2010年10月9日13時55分発行